

対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法：動詞の意味構造

空間移動の言語表現：実験的対照研究から分かること

課題：移動事象を諸言語がどのように言語化するのか

1. 類型論的研究

● 経路表現位置 (Talmy 1991, Matsumoto 2018)

● 経路主要部表示型言語 (動詞枠付け言語)

スペイン語などは経路を主動詞で表現

La botella salió de la cueva flotando.
the bottle moved.out from the cave floating

● 経路主要部外表示型言語 (付随要素枠付け言語)

英語などは経路を主動詞以外の要素で表現

The bottle floated out of the cave.

● 様態と直示性の言語化頻度 (Slobin 2006, Koga 2017)

どのくらいの頻度で様態や直示性に着目して言語化するか

2. NINJAL Project on Motion Event Descriptions across Languages (MEDAL)

● 統一的な発話実験によって20の言語を調査

● 諸言語の共通性と差異を明らかにし、その中で日本語がどのように位置づけられるかを考察

日本語 (古賀/吉成/松本) 日本手話 (今里) 英語 (秋田/眞野/松本)
ドイツ語 (高橋亮介) フランス語 (守田) イタリア語 (吉成)
スペイン語 (トアンチュニャーノ) ロシア語 (ボルジロフスカヤ)
ハンガリー語 (江口) モンゴル語 (バドマ) 中国語 (小嶋、夏)
ネパール語 (松瀬) タイ語 (高橋清子) タガログ語 (長屋)
エロカノ語 (山本) クプサピニ語 (河内) シンダーマ語 (河内)
スワヒリ語 (カフンブル) ユビック (田村) バスク語 (石塚)

3. 実験A

● 諸言語における移動の様態、経路、直示性の表現の全体的な比較

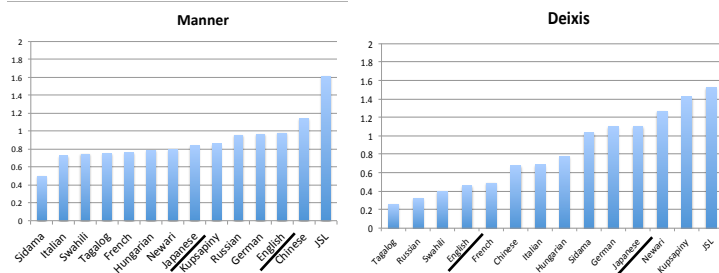
● 以下の3種類の様態・経路・直示の組み合わせからなる27のクリップを使用

様態：Walk, Run, Skip

経路：To, Into, Up

直示：Toward S, Away from S, Neutral (S=話し手)

● 様態と直示性の表現頻度 (1クリップごととの平均)



● 日英語の比較

● 友達が走って入って来た。

様態、経路、直示が共存し、3つを示しやすい。歩行の場合は低指定率

● My friend ran into the house toward me.

様態と直示が主動詞で競合。ほとんどの場合様態が勝ち、直示は示したいときのみ付加詞で表現

4. 実験C

● 経路の種類によって、どの要素で経路を表すかが異なるか
● 通言語的に、特定の経路シーンが主動詞で表現されやすいか

調査対象

A) 方向：UP, DOWN

B-1) 起点着点：TO, FROM, INTO, OUT OF, TOWARD

B-2) 中間点：ACROSS, THRU, PAST, VIA(BETWEEN), VIA(UNDER), AROUND, ALONG

● 日本語の結果

UP: 女の人が 階段を 歩いて登って行った。

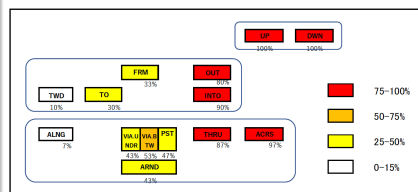
ACRS: 男の人が 道路を 走って渡って行った

ARND: 男の人が 木の周りを 歩いて一周した。

PST: 女の人が ポストの前を 歩いて行った

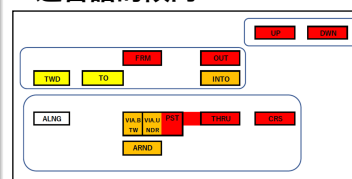
TWD: 男の人が テーブルに向かって 走って行った。

ALNG: 男の人が 川にそって 歩いて行った。

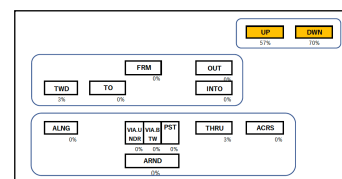


経路の主要部表現率
テ形動詞も主要部複合体の一部と考える

● 通言語的傾向



フランス語



ロシア語

● 主動詞で表現されやすいもの：

● 方向性のUP, DOWN (垂直軸のもの)

● 境界越え (INTO, OUT, ACROSS, THRU)

5. 結語

● 日本語は次の特性を持つ。

● 直示性高頻度言語、様態限定頻度言語。

● 複数の動詞で動詞複合体を作ることが出来るので、様態、経路、直示性が動詞複体内で共存する (共存型)。

● 経路はかなりの種類を主動詞複体内で表現する (経路主要部表示型)。しかしすべての経路がそうではない。

● 経路表現位置の類型論は、経路スケール上のどの範囲をを主動詞で表すかという観点から再定義される

文献

- 古賀裕章. (2017) 「日英独露語の自立移動表現：対訳コーパスを用いた比較研究」
松本曜 (編) 『移動表現の類型論』 くろしお出版
- Matsumoto, Y. (2018) Motion event descriptions in Japanese from typological perspectives. In T. Kageyama & P. Pardeshi (eds.), *Handbook of Japanese contrastive linguistics*, 273–289. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Slobin, D. I. (2006) What makes manner of motion salient? In M. Hickmann & S. Robert (eds.), *Space in languages: Linguistic systems and cognitive categories*, 59–81. Amsterdam: John Benjamins.
- Talmy, L. (1991) Path to realization: A typology of event conflation. *Proceedings of the Seventeenth Annual Meeting of Berkeley Linguistics Society*, 480–519.